

【 復活トロパリ 第7調 】



ハリストオスか神みよ、なんぢはじゅうじかにてしを  
 爾十字架死  
 ほろぼし、とうぞくのためにらくえんをひ開  
 滅盗賊爲樂園開  
 らき、けいこうぢよのかなしみをなぐさ  
 攜香女悲慰  
 め、しとになんぢがふくかつつして、せか界  
 使徒爾復活世世  
 いにおおいなるあわれみをたまいしをつたえ  
 大憐賜傳  
 させたまえり。  
 給

【 日本の亜使徒ニコライのトロパリ 第4調 】



しととひとしくどうざなるもの、ちゅう  
 使徒等同座るもの、ちゅう  
 じつにしてしんちなるハリストスのえきしゃ、せい  
 實神智の役者、せい  
 なるしんにえられたるふえ、ハリストスのあい  
 神撰るふえ、ハリストスのあい  
 にみちたるうつわ、わがくにのこう  
 満器我國の光

しよ お しゃ、あしとしゆきょうせいニコライ  
 照 者 亜使徒主教聖  
 よ、なんぢのぼくぐんのため、および  
 爾 羊 群 爲 及  
 ぜんせかいのため、いのちをたもうせい  
 全世界 爲 生命 賜 聖  
 さんしゃにいのりたまえ。  
 三者 祈 給

【 日本の亜使徒ニコライのコンダク 第4調 】

こうえいはちちとこおとせいしんにき  
 光 榮 父 子 聖 神 歸  
 す、

せいせいしゃあしとせいニコライよ、わが  
 成 聖 者 亜使徒聖 我  
 くになんぢをたびびとおよびいほうじんとうけ  
 國 爾 旅 人 及 異邦 人 受  
 しに、なんぢははじめわがくににおいておの  
 爾 初 我 國 於 己  
 れをがいらいしゃとしりたれども、ハリストスの  
 外 來 者 知  
 ひかりとあたたかきをながし、なんぢのて  
 光 暖 流 爾 敵

きをぞくしんのことなあし、かれらにか  
 屬 神 子 爲 彼 等 神  
 みのおんちようをあたえ、ハリストスのきょうかいをたて  
 恩 寵 與 教 會 建  
 たり、いまこのきょうかいのためにいのり  
 今 此 教 會 爲 祈  
 たまあえ、けだしわれらそのしよしはなん  
 給 蓋 我 等 其 諸 子 爾  
 ちによぶ、わがよきぼくしゃよ、よろこ  
 呼 我 善 牧 者 慶  
 べよ。

【 復活のコンダク 第7調 】

いまもおいつうもよよにい、アミン  
 今 何 時 世 世  
 しのけんはすでにひとびとをとらうるあた  
 死 權 已 人 人 捕 能  
 わず、けだしハリストスはくだりてそのち力  
 蓋 降  
 からをやぶりにほろぼしたまえり。ぢご  
 敗 滅 給 地 獄  
 くはしばられ、よげんしゃはどうしんによろ  
 縛 預 言 者 同 心 喜

こびてよ 呼ぶ、きゆうせ いしゅ は しんにおる  
 救世主 信居  
 ものにあらわれたり、しんじゃよ、ふく  
 者 現 信者 復  
 か 活 つして いいで よ。  
 出

司祭) ( 黙誦： <sup>せい</sup> 聖なる神、<sup>かみ</sup> 聖者の中に<sup>せいじゃ</sup> 息い、<sup>うち</sup> セラフィムより<sup>いこ</sup> 聖三の聲を以て歌頌せられ、  
 ヘルヴィムより<sup>さんえい</sup> 讚榮せられ、<sup>ことごと</sup> 悉くの<sup>てんぐん</sup> 天軍より<sup>ふくはい</sup> 伏拝せられ、<sup>ばんぶつ</sup> 萬物を<sup>む</sup> 無より<sup>ゆう</sup> 有と  
 なし、<sup>ひと</sup> 人を<sup>なんぢ</sup> 爾の<sup>ぞう</sup> 像と<sup>しょう</sup> 肖とに<sup>よ</sup> 依りて<sup>つく</sup> 造り、<sup>なんぢ</sup> 爾が<sup>もろもろ</sup> 諸の<sup>たまもの</sup> 賜を以て<sup>もつ</sup> 之を<sup>これ</sup> 飾り、  
 願う者に<sup>もの</sup> 智慧と<sup>ちえ</sup> 明悟とを<sup>めいご</sup> 與え、<sup>あた</sup> 罪を<sup>つみ</sup> 行う者を<sup>おこな</sup> 棄てずして、<sup>もの</sup> 其救の<sup>す</sup> 爲に<sup>そのすくい</sup> 痛悔  
 を<sup>た</sup> 立て、<sup>われらいや</sup> 我等卑しくして<sup>ふとう</sup> 不當なる<sup>なんぢ</sup> 爾の<sup>しょぼく</sup> 諸僕を、<sup>こ</sup> 此の<sup>とき</sup> 時に<sup>おい</sup> 於ても、<sup>なんぢ</sup> 爾が<sup>せい</sup> 聖な  
 る<sup>さいだん</sup> 祭壇の<sup>こうえい</sup> 光榮の<sup>まえ</sup> 前に<sup>た</sup> 立ちて、<sup>なんぢ</sup> 爾に<sup>とうぜん</sup> 當然の<sup>ふくはいさんえい</sup> 伏拝讚榮を<sup>たてまつ</sup> 奉るに<sup>た</sup> 堪うる<sup>もの</sup> 者と  
 なしし<sup>しゅさい</sup> 主宰よ、<sup>なんぢみづか</sup> 爾親ら<sup>われら</sup> 我等<sup>ざいにん</sup> 罪人の<sup>くち</sup> 口よりも<sup>せいさん</sup> 聖三の<sup>うた</sup> 歌を受け、<sup>う</sup> 爾の<sup>なんぢ</sup> 仁慈を  
 以て<sup>もつ</sup> 我等に<sup>われら</sup> 臨み、<sup>のぞ</sup> 我等に<sup>われら</sup> 凡そ<sup>およ</sup> 自由と<sup>じゆう</sup> 自由ならざる<sup>じゆう</sup> 罪を<sup>つみ</sup> 赦し、<sup>ゆる</sup> 我が<sup>わ</sup> 靈と<sup>たましい</sup> 體と  
 を<sup>せい</sup> 聖にし、<sup>われら</sup> 我等に<sup>しょうがいぜんこう</sup> 生涯善功を以て<sup>もつ</sup> 爾に<sup>なんぢ</sup> 務むるを<sup>つと</sup> 得せしめ<sup>え</sup> 給え、<sup>たま</sup> 聖なる  
 生<sup>しょうしんぢよ</sup> 神女と<sup>こせい</sup> 古世より<sup>なんぢ</sup> 爾の<sup>よろこび</sup> 喜を<sup>な</sup> 爲しし<sup>しよせいじん</sup> 諸聖人との<sup>きとう</sup> 祈禱に<sup>よ</sup> 依りてなり、 )

司祭) 蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世  
 に、

ア ミ ン。

【 聖三祝文 】

せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなる  
 聖 神 聖 勇 毅 聖

じょう せい の も の よ、 わ れ ら を あ わ れ め  
 常 生 者 我 等 憐

よ 。 せい なる か み、 せい なる ゆ う き、 せい  
 聖 神 聖 勇 毅 聖

なる じょう せい の も の よ、 わ れ ら を あ わ れ  
 常 生 者 我 等 憐

め よ 。 せい なる か み、 せい なる ゆ う き、  
 聖 神 聖 勇 毅

せい なる じょう せい の も の よ、 わ れ ら を あ わ  
 聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 こ う え い は ち ち と こ と せい しん  
 光 榮 父 子 聖 神

に き す、 い ま も い つ も よ よ に、 ア ミ ン。  
 歸 今 何 時 世 世

せい なる じょう せい の も の よ、 わ れ ら を あ わ  
 聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 せい なる か み、 せい なる ゆ う  
 聖 神 聖 勇

き、 せい なる じょう せい の も の よ、 わ れ ら を  
 毅 聖 常 生 者 我 等

あ わ れ め よ 。  
 憐

司祭) ( 黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國

こうえい ほうざ あ つね あが ほ いま いつ よよ  
の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、 )

プロキメン  
【 提 綱 主日第7調 】

司祭) 慎みて聴くべし、衆人に平安、

誦經) 爾の神にも、

司祭) 睿智、

誦經) プロキメン、主は其民に力を賜い、主は其民に平安の福を降さん、

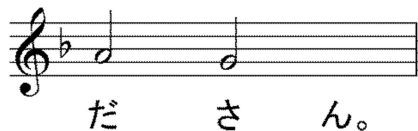
しゅ は その た み に ち か ら を た ま い 、 しゅ は  
主 其 民 力 賜 主  
その た み に へ い あ ん の ふ く を く だ  
其 民 平 安 福 降  
さ ん。

誦經) 神の諸子よ、主に獻ぜよ、光榮と尊貴とを主に獻ぜよ、

しゅ は その た み に ち か ら を た ま い 、 しゅ は  
主 其 民 力 賜 主  
その た み に へ い あ ん の ふ く を く だ  
其 民 平 安 福 降  
さ ん。

誦經) 主は其民に力を賜い、

しゅ は その た み に へ い あ ん の ふ う く う を く 降  
主 其 民 平 安 福



【 アポストロス 使徒經 221 端 エフェス書 2 章 14 節～22 節 】

司祭) <sup>えいち</sup> 睿智、

誦經) <sup>せいしと</sup> 聖使徒 <sup>じん たつ</sup> パヴェルが <sup>しょ よみ</sup> エフェス人に達する書の讀、

司祭) <sup>つつし</sup> 謹みて聽くべし、

誦經) <sup>けいてい</sup> 兄弟よ、<sup>われら わへい</sup> ハリストスは我等の和平なり、<sup>ふたつ</sup> 二の者を <sup>ひとつ</sup> 一と爲し、<sup>へだて</sup> 隔の牆を <sup>かき</sup> 毀ち、<sup>こぼ</sup> 己 <sup>おのれ</sup>

<sup>み</sup> の身を以て <sup>あだ</sup> 仇を廢し、<sup>はい</sup> 教を以て <sup>おしえ</sup> 諸誠の <sup>しょかい</sup> 律法を <sup>りつぽう</sup> 廢せり、<sup>はい</sup> 是れ <sup>こ</sup> 和平を <sup>わへい</sup> 爲して、<sup>ふたつ</sup> 二の者

<sup>もつ</sup> を以て、<sup>おのれ</sup> 己に於て、<sup>ひとつ</sup> 一の <sup>あらた</sup> 新なる <sup>ひと</sup> 人を造り、<sup>また</sup> 又 <sup>じゅうじか</sup> 十字架にて <sup>あだ</sup> 仇を <sup>ころ</sup> 殺し、<sup>これ</sup> 此を以て、

<sup>ひとつ</sup> 一の身に於て、<sup>み</sup> 二の者を <sup>おひ</sup> 神と <sup>ふたつ</sup> 復和せし <sup>かみ</sup> めん <sup>ふくわ</sup> 爲なり。<sup>ため</sup> 且來りて、<sup>かつきた</sup> 爾等 <sup>なんぢら</sup> 遠き者 <sup>おのれ</sup> 及び <sup>ちか</sup> 近

<sup>もの</sup> き者に <sup>わへい</sup> 和平を <sup>ふくいん</sup> 福音せり、<sup>けだし</sup> 蓋 <sup>かれ</sup> 彼に <sup>よ</sup> 由りて、<sup>われら</sup> 我等 <sup>ふたつ</sup> 二の者は、<sup>ひとつ</sup> 一の <sup>しん</sup> 神に <sup>あ</sup> 在りて、<sup>ちち</sup> 父に <sup>ちか</sup> 近

<sup>う</sup> づくを得るなり。<sup>ゆえ</sup> 故に <sup>なんぢら</sup> 爾等 <sup>すで</sup> 既に <sup>いみん</sup> 異民、<sup>あるい</sup> 或 <sup>たほう</sup> は <sup>ひと</sup> 他邦の人 <sup>すなわち</sup> たら <sup>せいと</sup> ず、<sup>どうほう</sup> 乃 <sup>ひと</sup> 諸 <sup>せいと</sup> 聖徒の <sup>どうほう</sup> 同邦の人、

<sup>かみ</sup> 神の家 <sup>かぞく</sup> 屬なり、<sup>なんぢら</sup> 爾等 <sup>しよしと</sup> は <sup>しよよげんしゃ</sup> 諸使徒と <sup>もとい</sup> 諸預言者との <sup>た</sup> 基に <sup>た</sup> 建てられたり、<sup>いすす</sup> イイスス・<sup>ハリストス</sup> ハリストス

<sup>みづか</sup> は <sup>その</sup> 自ら <sup>すみいし</sup> 其 <sup>こ</sup> 隅石 <sup>うえ</sup> なり。<sup>ぜん</sup> 此の <sup>おく</sup> 上に <sup>く</sup> 全 <sup>た</sup> 屋 <sup>しだい</sup> は <sup>きづ</sup> 組み <sup>しゅ</sup> 立て <sup>お</sup> られ、<sup>せい</sup> 次第 <sup>いでん</sup> に <sup>せい</sup> 築 <sup>いでん</sup> きて、<sup>せい</sup> 主に <sup>せい</sup> 於ける <sup>いでん</sup> 聖殿と

<sup>な</sup> 爲る、<sup>こ</sup> 此の <sup>うえ</sup> 上に <sup>なんぢら</sup> 爾等 <sup>しん</sup> も、<sup>よ</sup> 神に <sup>かみ</sup> 由りて、<sup>すまい</sup> 神の <sup>とも</sup> 居處 <sup>た</sup> として、<sup>とも</sup> 共に <sup>た</sup> 建てらるるなり。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) キリストはわたしたちの平和であって、二つのものを一つにし、敵意という隔ての中垣を取り除き、ご自分の肉によって、数々の規定から成っている戒めの律法を廃棄したのである。それは、彼にあって、二つのものをひとりの新しい人に造りかえて平和をきたらせ、十字架によって、二つのものを一つのからだとして神と和解させ、敵意を十字架にかけて滅ぼしてしまったのである。それから彼は、こられた上で、遠く離れているあなたがたに平和を宣べ伝え、また近くにいる者たちにも平和を宣べ伝えられたのである。というのは、彼によって、わたしたち両方の者が一つの御霊の中にあつて、父のみもとに近づくことができるからである。そこであなたがたは、もはや異国人でも宿り人でもなく、聖徒たちと同じ国籍の者であり、神の家族なのである。またあなたがたは、使徒たちや預言者たちという土台の上に建てられたものであって、キリスト・イエスご自身が隅のかしら石である。このキリストにあって、建物全体が組み合わされ、主にある聖なる宮に成長し、そしてあなたがたも、主にあつて共に建てられて、靈なる神のすまいとなるのである。

\*\*\*\*\*

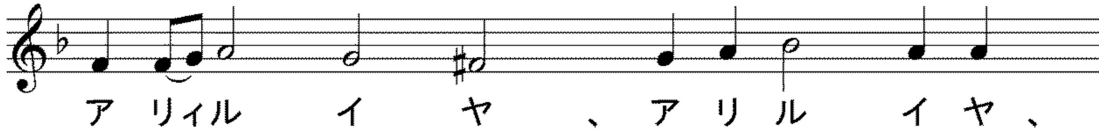
【 アリルイヤ 主日第7調 】

司祭) <sup>なんぢ へいあん</sup> 爾に平安、

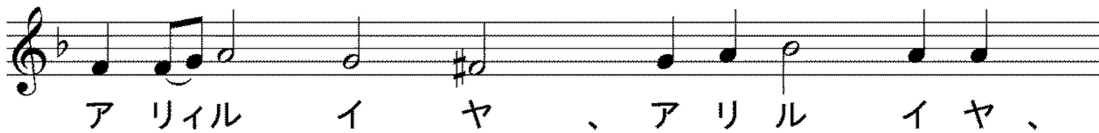
誦經) <sup>なんぢ しん</sup> 爾の神にも、

司祭) <sup>えいち</sup> 睿智、

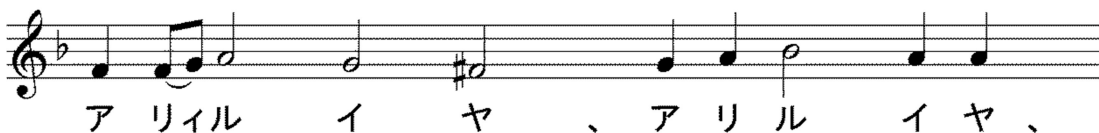
誦經) アリルイヤ、



誦經) <sup>しじょうしゃ しゅ さんえい なんぢ な うた び かな</sup> 至上者よ、主を讚榮し、爾の名に歌うは美なる哉、



誦經) <sup>なんぢ あわれみ あさ の なんぢ まこと よ の び かな</sup> 爾の憐を朝に宣べ、爾の眞を夜に宣ぶるは美なる哉、



司祭) ( 黙誦: <sup>ひと あい しゅさい わ こころ かみ し ちえ いきぎよ ひかり かがや わ しねん</sup> 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の 浄き光を輝かし、我が思念

<sup>め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ</sup> の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる 誠を

<sup>おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よるこ ところ</sup> 畏るる 畏をも入れて、我等が 悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所

<sup>おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ</sup> を思い且つ行いて、属神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神よ、

<sup>なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん</sup> 爾は我が 靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善にし



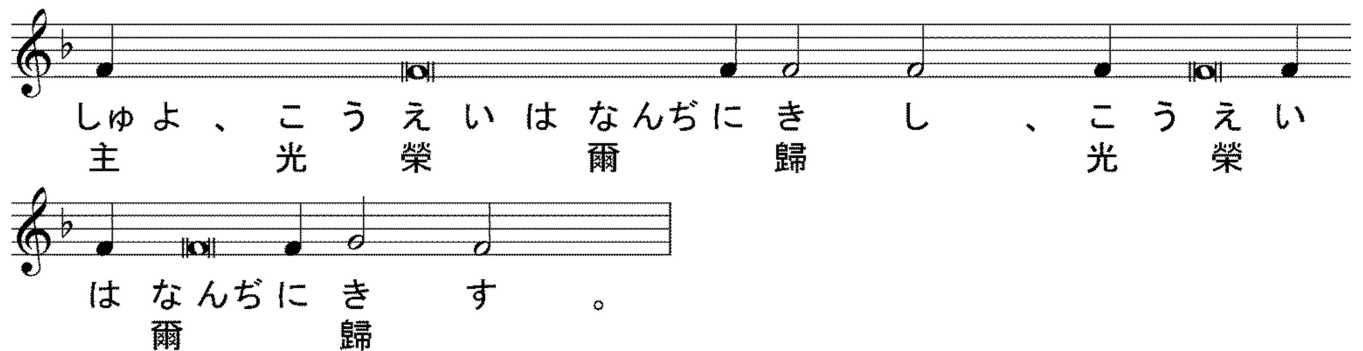
いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ  
て生命を施す爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世に、アミン。 )

エヴァンゲリオン  
【 福音經 ルカ福音書 53 端 10 章 25～37 節 】

司祭) 睿智、 肅みて立て聖福音經を聴くべし、 衆人に平安、



司祭) ルカ傳の聖福音經の讀、



司祭) 謹みて聴くべし、彼の時一の律法師イイススに就きて、彼を試みて曰えり、師よ、我

何を爲して永遠の生命を嗣がんか。彼は之に謂えり、律法に何をか録せる、爾如何に読

むか。答えて曰えり、爾心を盡し、靈を盡し、力を盡し、意を盡して、主爾

の神を愛せよ、又爾の鄰を愛すること、己の如くせよ。イイスス之に謂えり、爾の

答えし所正し、之を爲せ、乃生きん。然れども彼は己を義とせんと欲して、イイス

スに謂えり、我が鄰とは誰ぞや。イイスス答えて曰えり、或人イエルサリムよりイェリホン

に下る時、盜賊に遇へり、彼等其衣を剥ぎ、彼に傷つけ、幾ど死するばかりにして、

彼を捨て去れり。適一の司祭是の路より下りしが、彼を見て、過ぎ去れり。同じくレ

ヴィトも彼処に至り、近づきて彼を見て、過ぎ去れり。惟或サマリヤ人は行きて、此に至り、

彼を見て憫み、就きて、其傷に油と酒とを沃ぎて、之を裹み、彼を己の家畜に乗せ、

旅館に引き至りて、彼を看護せり。明日行かんとする時、銀二枚を出し、館主に與え

て、之に謂えり、此の人を看護せよ、費若し之より益さば、我返る時爾に償わん。此

の三人の中、爾孰を盜賊に遇いし者の鄰と意うか。彼曰えり、此の人に矜恤を

ほどこ もの かれ い ゆ なんぢ か ごと おこな  
施しし者なり。イエス彼に謂えり、往きて、爾も是くの如く行え。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) ある律法学者が現れ、イエスを試みようとして言った、「先生、何をしたら永遠の生命が受けられましょうか」。彼に言われた、「律法にはなんと書いてあるか。あなたはどうか読むか」。彼は答えて言った、「『心をつくし、精神をつくし、力をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ』。また、『自分を愛するように、あなたの隣り人を愛せよ』とあります」。彼に言われた、「あなたの答は正しい。そのとおり行いなさい。そうすれば、いのちが得られる」。すると彼は自分の立場を弁護しようと思って、イエスに言った、「では、わたしの隣り人とはだれのことですか」。イエスが答えて言われた、「ある人がエルサレムからエリコに下って行く途中、強盗どもが彼を襲い、その着物をはぎ取り、傷を負わせ、半殺しにしたまま、逃げ去った。するとたまたま、ひとりの祭司がその道を下ってきたが、この人を見ると、向こう側を歩いて行った。同様に、レビ人もこの場所にさしかかってきたが、彼を見ると向こう側を歩いて行った。ところが、あるサマリヤ人が旅をしてこの人のところを通りかかり、彼を見て気の毒に思い、近寄ってきてその傷にオリーブ油とぶどう酒とを注いでほうたいをしてやり、自分の家畜に乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。翌日、デナリ二つを取り出して宿屋の主人に手渡し、『この人を見てやってください。費用がよけいにかかったら、帰りがけに、わたしが支払います』と言った。この三人のうち、だれが強盗に襲われた人の隣り人になったと思うか」。彼が言った、「その人に慈悲深い行いをした人です」。そこでイエスは言われた、「あなたも行って同じようにしなさい」。

\*\*\*\*\*

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい  
主 光 榮 爾 歸 し 光 榮

はなんぢにきす。  
爾 歸

※聖体礼儀③ (金口イオアン聖体礼儀) へ